

当事者研究の世界

～にもかかわらず研究するという生き方・暮らし方～¹

向谷地生良

はじめに

今日は北海道の浦河から二人のスタッフと共にお届けします。私はソーシャルワーカーで、浦河べてるの家と北海道医療大学を拠点に当事者研究をはじめ、さまざまな取り組みをしています。私は、「先天的忘れ物症候群、先生と名の付く人とうまいかないタイプ」です。

私は和田智子といいます。統合失調症を経験しながら、べてるの家でソーシャルワーカーとして働いています。自己病名は、「自分にバツをつけることで安心するタイプ」です。



講演者3人

僕は、伊藤知之です。統合失調症を持ちながらソーシャルワーカーをしています。得意な苦勞は「パニック」です。物が無い、人がいないというキーワードに弱く、この二つに出逢うと地球が減びるかのような感覚になりあわてる状態、パニックを起こします。

1. 浦河べてるの家

北海道の太平洋沿いの小さな町浦河に来て、精神科病棟で出会った若者たちと起業を志しながら、時には火花を散らし、「社会進出」を旗印に町にくりだしていた頃から、43年が経ちます。

さまざまな個性がぶつかり合いながら、助け合って困難な現実と踏み出す手段として、フッサールの現象学の「<自分自身で><共に>研究するな